
異世界最強主人公探索記

雷龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界最強主人公探索記

【Nコード】

N4913U

【作者名】

雷龍

【あらすじ】

世界の全ては神すらも知らないの完結後（まだまだ完結しません）の十数年後の話です。
世界の全ては神すらも知らないとは、設定や一部の人物以外関係があまりないようにする予定です。

野川楓は、普通の大学生だった。

だが、トラックではなくあるものに轢かれて…？

異世界最強主人公で、非ハーレム予定です。

第一話（前書き）

何か、自分で言うのも何ですが、
凄まじいまでのチートが出ます。もうチートの域出てます（笑）

と、アホみたいな思考に浸りながら信号を渡っていると、本当に運ちゃんが居眠りしているトラックが暴走しながら、こっちに向かってきた。…が、

「しかし俺はまだ死なん!!」

ぬそう言いながら、俺はモン　ンのハンターも真っ青なダイブを決めて、

トラックを避けて交差点に体を投げた。

…だが、その時こっちに向かってきたハーレーがいた。

(しかしダイブ中は無敵だ!…じゃねえ!)

そんなアホな思考に少し浸り、俺はトリップトラックならぬ、トリップハーレーに体を轢かれ、この世界での人生を終えた。

…気が付くと、真っ白な空間に俺はいた。

いや、マジで真っ白なんだな。もう少し違うと思ってたわ。

すると、そこに白いコートと黒いTシャツと黒いズボンを身に付けた、白髪の凄いイケメンが現れた。

…そこは美女じゃねえのかよ!？ま、まあ、向こうで捕まえればいいか…

「おう、見事なモ　ハンダイブだったな」

…えー!?!?!何でモン八　のこと知ってたんだよ!？

ふ「ん?ああ、実は訳あって少し前までここいらに居たんだ。その時に少ししゃったんだよ。」

「心を読まれた!?!? あ、そっかそういえばそういうのあったな…」
「…お前、結構達観してるな。自分が死んだのに、何も感じないのか?」

親はもう既に亡くなってしまっているようだが、友や親しかった者はどうなんだ?」

「ん… 確かに、母さんと父さんはもう亡くなっているから、別に気にしなくていいし、

自分は、平凡すぎたこの生活に未練はない、友達も親しかった人もあんまりいなかったしなあ…」

そう、実は俺は小さいときに両親を事故で亡くしたのだ。それが原因で、あんまり友達は作れなか(ry)…作らなかつたしな。

「そうか…。じゃあ、何故ここにお前が居るかわかるか?」

「そりゃあ、あんたのミスで俺が殺されたから、異世界に転生させてくれるんだろ? もちろん、チート付きで」

「ん?!? ああ、そうだな。話を通じやすくして、やり易いよ。だが、お前が死んだのは俺のミスじゃないぞ。

俺は、お前が面白い考えをしていたから観察していたんだが、そうしたら、

お前がいきなり死んだんだよ。突然すぎて俺も防げなかつたほどいきなりな。

んで、俺があまりにも可愛そうだから、ここに呼んだんだ。」

「おいおい、それマジか!?!?」

「ああ、マジだ。」

…俺、運悪すぎだろ…

神すらもいきなりつていうほど、突然死ぬつて…

俺がorz状態になっていたら、神様が気にかけてながら話しかけてきた。

「おい、大丈夫か?!? 次の世界では、運を上げておいてやるからそ

う気を落とすなよ。勿論、無料だからな？」

「お、おう、ありがとうな。…ここまで運がないとちよつとな…」

「…まあ、取り合えず異世界にトリップさせる時に得る能力だが、能力はこちらが決めるぞ？」

本当は、もう少しレベルの低い能力を授ける筈だったんだが、お前があまりにも可愛そうだからな…

俺はこの力を持てば、一応ほとんどの希望は叶えられる筈だと思っているからな。」

「お！ありがとうな！で、その能力ってなんだ？」

「授ける能力は、”神の絶対服従”と”神の完全なる不老不死”と

”神の絶対精神安定”だ。

最初のは少し威力は下げて、上級神以上には効かないようにしたが、そこは容赦してくれ。」

ああ、そうそう、この三つだけど俺以外の神に会ったときは、絶対に神には影響しないって言ってくれよ？他の神が嫌いからな。」

「で、三つの能力の効果はなんなんだ？（”神の”って、もしかして凄いい能力じゃね？）」

そう、俺は心の中でそう予想した

ちなみに、結果は予想の遥か上を行っていたが…

「ああ、まず”神の絶対服従”だが

全ての概念使用者に服従させるんだ。誰かに死ねと言えば死に、生き返れと言えば、生き返る。出来ないことはほとんどない…てか極一部だな。

出来ないのは、上級神以上への存在への干渉のみだからな。

はつきりいって、この能力があれば俺みたいに全ての神の頂点に立つことも出来るが、少し威力を落としたから無理だ。

でも、筆頭中級神のまでなら簡単に倒せるぞ。頑張れば中堅の下ぐらいの上級神位は殺せる。はつきりいってこの能力が一番のチート能力だな。」

「…おい！それは不味くないか！？神を殺せるとかヤバイだろ！？

ていうかお前最高神なのか!？」

「いや、お前は殺る勇氣ないだろ？」

第一、俺が許可しないと殺せないしな。そうそう、確かに俺は最高神だな。一応序列第一位だ。」

「そ、そうか:(一番最初がこれってヤバくないか?てか何気なくけなしてるよな?てか最高神!?序列第一位ってなに!?)」

いろんな意味で冷や汗が出てきた俺であったが、目の前の最高神は構わず説明を続けていた。

「次の”神の完全なる不老不死”だが

これも凄いチートだな。これは最上級神以上の実力を持つ者以外の攻撃では死なんし朽ちん。

後、傷は超速度で再生するぞ。まあ、再生がしないようにすることも出来るがな。そうそう、余談だけどこの上に、神の絶対なる不老不死つてのがある。」

「もう、なにも言わない:(凄すぎるだろ:)」

「最後は、”神の絶対精神安定”だ。

これは、名前の通りだな。いくら人を殺しても、スプラッタな現象を見ても全く動じないし、

我々不老不死の宿命である気が狂うほどの長い時間にも対抗できる。それに、ほとんどの神が使ってくる必殺技的な精神制御や、精神崩壊などに対抗できる。普通の最高神レベルでは効かないだろうな…

多分効くのは俺ぐらいだ。」

「(もう、いいです……)」

チート過ぎて、何だか情けなくて申し訳なくなってきた…

「これで大丈夫だろう。野川 楓…

新しい世界で頑張ってくれよ!」

「…はい…本当に、ありがとうございます……ズズズ…」

ヤバイな、ありがたすぎて泣けてきた…

「おいおい、泣くなよ(笑)

…因みに、俺の名前はクレルドだ。

何か困ったことがあったら、俺に会えるか喋れる能力を作れ。できる範囲でサポートしてやるよ。ここまでしたとなると、これからは俺たちは友達だな…

…さあ、行ってこい！」

「…はい！ありがとうございます！いや、ありがとうございますクレルド！」

そう俺が言うなり、俺の足元にきらびやかな魔法陣が現れ、俺の意識は無くなっていった

俺がクレルドの言った友達の本当の意味を知るのは、この後すぐだった

第一話（後書き）

…はい、雷龍です。

まだ一作目も全然進んでないのに、
二作目に手を出しちまったぜ

…すみませんすみません…

止めて！石は投げないで！

亀更新になる予定なので、のんびり出来る方のみお読みください。

第二話（前書き）

雷龍暴走警報発生中… 雷龍暴走警報発生中…

かなりの駄文が出現する恐れがあります。ご注意ください。
それでも構わないという方はどうぞお読みください。

第二話

第二話

「ふう…さてと、取り敢えずは状況把握だな。」

俺はそう言うなり、周りを見回した。すると…

「ごめんごめん、能力の使い方教えるの忘れてたわ」

と、言いながらウルキ ラみたいにガ ガンタを開くようにして、イケメン最高神様が現れた。

「おうっ！？…ビックリさせるなよ…心臓が止まるかと思っただろうが…」

「おう、すまんすまん。でな、能力の発生条件なんだがな？」

楓が想像したり、言葉で発したりすると”神の絶対服従”が発揮される。

まあ、この能力と常時発揮型以外の能力は”神の〜〜”と口頭で言わないとダメだな。

あ、そうそう。出来るのはこの能力位だが、理論や法則を構築して、発生させることも出来る。

まあ、まだ理解は難しいだろうし、後で教えてやるから、今は使えないようにしておくからな。間違ったらこの世界すらも消しかねないしな…

後の二つは常時能力を発揮してるから、別に気にする必要はないぞ。

「成る程…つまり”神の絶対服従”は言葉が発することができなくても、能力は発揮できる訳だな？」

「ああ、それであっている。」

「因みに聞きたいんだが、全ての概念を使用者に服従させるんだつたら、新しい能力や魔法を作ったり、

自身や他人の身体能力などを変化させたりすることは可能なのか？
ていうか、この世界に魔法とか有るのか？」

「そうだな。二つの質問の答えはYesだ。あと、ちゃんと言っただろ？これがあればほぼ万能だつてな。

概念を操るんだから、概念に縛られている世界の理や、神が交わすのを許可した誓約さえも越えることができる。

だが、それでも上級神以上が関わっていた場合を除くがな。

まあ、さっきも言ったけど楓が望むことは本当に極一部を除いて何でも実現可能だつてことだ。

追加情報だけど大人数の行動や、深層心理を操ることも出来るぞ？
でかくなると、世界そのものを操ることもできるしな。

因みに、この世界は典型的なお前達という魔法と剣のファンタジー世界だから安心しろ。」

「本当にチートだなあ…でも安心したな。もし、できなかったら今頃、殴りまくってたことだろうよ。」

内心、俺はかなり安心してた。もし、能力を増やしたりすることができなかつたらどうしようかと思っていたところだったのだ。

ここで、俺は当然な感想を言った。

「しっかし、この能力つて名前通り神の能力だから、これを三つも持ってるって、まるで俺つて神みたいだな（笑）」

俺は冗談のつもりで言ったんだが…

「ん？お前、今は神だぞ？それも凄い高位の。だから言っただろ、
”友達”だと。神としてな。」

…クレルドがとんでもないことを言いやがった。

「…マジか？」

「このやり取り二回目だが、マジだ。」

「…はあ……もう驚かないぞ。何かどうでも良くなってきたしな…」

もう、慣れまし（ry）

「そこまで俺の”いきなり神様就任!?”どつきりスペシャル!”でどつきりしている奴ははじめて見たぞ。

あ、因みに役職は中級神の最上級位の筆頭中級神で、

神階級は第二十四階位だ。本当なら、最上級神の第三十二階位の筆頭クラスなんだけどな?てか半分最高神状態。

まあ、お前は事務職とか執務とか出来ないだろうから、わざとそれらをする必要のない程度の位の最上位の役職に就かせただけだな。

「

「…おう、そうか、ありがとう（ネーミングセンスねえな… それと、いつの間に神になったんだ?別にそんなのは授けられてないよな?）」

「今、失礼なこと考えたよな?」

「イ、イヤ、ソナナコトナイヨ?」

「片言だぞ?」

「…すみませんでした。もう考えません。」

「よろしい。」

この時、俺のなかでクレルドは逆らってはいけない人（神か?）ランキングぶつちぎりの第一位に認定された。ぬ

「じゃあ、何で楓が神になってしかも強い神の力、すなわち神力を得たのかを教えてやろう。」

まずその前に神になる方法を教えないとな。神になるためには”神の……”という名前が付いた、”神の資格”を三つ、程度によっては五つ以上持っていないとなれない。てかならないしな。

で、楓はそれらを三つ持っていたから、神になったってことだ。しかもそれらの効果が凶悪なまでに強力だったから、

その恩恵でとんでもなく影響力が強い地位に就くことができるまでの力を得ることができたんだ。

つまり、神になったのは、能力を授けたときの副産物ってことだ。まあ意図的なんだがな。」

「ふーん、じゃあ何で俺なんだ？俺以外にもっと良い人が神になった方がよかつたんじゃないか？」

内心、何で俺が… と、思っていた俺はそう問いかけた。

「いや、俺は実は神に相応しい者を探してチェックしていたんだ、楓を含んだ三十一名をな。」

そうしていたら、楓がハーレーに轢かれるところを丁度見てな、実際、楓が一番神になる素質を持っていたから、

これ幸いと、楓に接触し、異世界にいくという了承を得て、お前を神として送り出したわけだ。わかつたか？」

「ああ、わかつたが… 俺を神にした理由はなんなんだ？」

そこで俺がまた問うと、クレルドは少し申し訳なさそうな顔をして、真剣に

「実はな… 最近、ある事情で神が減ったんだ。そのせいで本来一番下級の神が一名につき一つから二つの世を担当して管理するはずが、

一名につき、五つから六つの世界を担当しなければならぬ事態に陥ってしまったな。

そこで、現在の最高神五名がそれぞれ一名ずつ新しい神を生み出して、

その神に新しい神に相応しい人材を探してもらおうという計画を最高神五人で秘密裏に決定したんだ。

…本来なら、最高神達が担当する役目だが、余った世界の管理につきつきりになってしまつのでな、出来ないんだ。

だから、失礼を承知で頼んむ。神になって、新しき神に相応しい者をこの世界を探索し、探してくれ。

別に拒否してくれても構わないし、拒否した場合も能力はそのままにしておく。本当に頼む。」

とって、土下座しながら謝ってきた。そこで俺は焦って、

「いやいやいや！テンプレみたいに、暇潰しで神にしたというなら話は別だけど、

失礼を承知で頼んむとまで言われて、土下座しながら頼まれたら、了承するしかないだろ。」

それに、別に俺はそんなことは異世界に行かせてくれたんだから、気にしてないし、しっかり役目をするよ。」

と答えた。すると…

「あ！そう！？ありがとうな。」

実は他の最高神達と一緒に俺も新しい神にする者が見つからなくてさあ…

困ってたんだわ！本当にありがとうな！」

「…いきなりシリアスモードぶち壊しか！？」

「そうだけど？何か問題あるか？」

…何か物凄い、心配とかして無駄な気分… さっきまでの同情を返せ。

「まあ、そんなことは置いといて（ヒヨイ）、楓に少し助言してやるよ。（両手で何かを横にどかすジェスチャー付き）」

「さつさと言つて、帰つてくれ。」

「ヒドッ！扱いが急に雑になつた！」

「さつさと言つてから帰れ。」

「はあ…はいはい、言いますよ。」

まずは、持っている能力を脳内でリストアップできる、”神の能力管理”を創ること。今はまだ良いが能力が増えれば混乱するからだ。次は、”神の絶対服従”のオンとオフを制御する能力を創ること。ポンポン想像したことが実現したら困るからな。

次は、”神の絶対なる会話・筆記・説得・交渉・生活術”を創ること。生活で便利だぞ。

しかも全ての言語を喋れて、書くことができる。何か足りなかつたらそこに加える。

次は、俺に接触することができ、”神の特定人物接触術”を創ること。

何か相談するとき俺に接触できる方が良いだろ？あ、会う者は俺以外でも会つたことがある者なら大丈夫だから。」

そこまで言つと、またクレルドは真剣な顔で話してきた。

「…最後は、助言じゃない。警告だ
しつかり聞いておけ。」

…ウエルダンド公国に気を付ける。あの国の者達で、信用できるものは少ない。

現在は名ばかりの宰相達十数名達しか居ないからな… あの国に行くなら、俺に事前に伝えてくれ。

後、何か困つたことが合つたら、この世界の最大宗派、ラスナムス教のラスナムス神皇自治領にいるコーラル神皇か、

大体あそこにいる、ベネディクトという老人に相談するか、

さっき言った方法で俺に相談してくれば良い。

まあ…気を付けて頑張れよ。」

「…ああ、ありがとう。精一杯、役目を頑張らせて貰うよ。…じゃあな。」

そうし、別の方向を向いて歩こうとしたとき

「いや、ちよつと待て。まだ話は終わってない。渡すものがある。」

と言われ、留まさせられた。

「渡すものってなんだ？」

「神の証の、指環と、殆どの世界で利用されている身分証兼クレジットカード兼電話だ。

指環は常時着けておいてくれ。カードには、裏にある四角い囲みに指を置けば、

指環とカードの説明と口座の残金がわかる。口座についても説明をされるから説明は省くぞ。

さっき言った神皇とベネディクトにはこの指輪を見せれば会えるだろう。」

と、
と言つて、クレルドは”24”と台座に刻まれた白金の指環

表には、俺の（元の世界ではそこそこモテていた）顔と名前（何故か読めた）が、

裏には、端に人差し指の先が丁度納まる程度の大きさの白い正方形が書かれた、黒色のカードを渡された。

（指環には裏に”32”と刻まれていた。

例えるなら、フリーメイソンの階位を示す指輪だ。

カードはクレジットカード位の大きさのものだと考えてくれて丁度良い位だ。ナンバーは書いていないが… てか書いてたら人数が多すぎてスペースが足りないだろうしな。）

クレルドはこの二つを渡すと、

「じゃあ、今度こそ、頑張れよ。」

良い人材を見付けながらなら、異世界を楽しめよ。」

と言ってガルガ タモドキを開き、帰っていった。

「ふう… さあて、今度こそ俺の新しい世界での生活の始まりだ！」

俺はそう心のなかで宣言した。

これから、野川 楓の異世界での生活が始まる！

今までありがとうございました。

完（嘘）

「終わらすんじゃねえよ！！！！」

…まだまだ続く予定です。

駄文ですが良ければ、お付き合い下さい。

第二話（後書き）

まだまだ終わりませんよ。

駄文量産機（スピード極遅）な雷龍ですが、

お付きあいできる方はどうか最後までお読みください。

第三話（前書き）

貯まっていたのを見つけたので投稿します。

第三話

第三話

クレルドが去ってから、俺は彼奴に貰ったカードを弄くつていた。

「確か、裏の端にある四角い囲みに指を置けば良いんだったよな？」

俺はそう言うと囲みに指を触れた。

すると、突然音声ガイダンスのような女性の声が聞こえ、カードがアパッド並みに大きくなった。

カードをもう一度見ると、アイパツのようになった画面(？)の中に、メニューがあった。それは次のような物だった。

… m e n u …

- ・所有者データ
- ・マップ、現在地確認
- ・O W W W オール・ワールド・ワイド・ウェブ 検索
- ・所有者口座の残金確認
- ・所有者口座の利用
- ・通話機能
- ・神
- ・設定
- ・ヘルプ

・カードをもとに戻す

「俺はつつこまないぞ!? 絶対につつこまないぞ!」

…一番目から六番目と八番目から十番目はまあ、良いし
よう。(つつこみたいところがあるが)

だが!七番目のは違う!明らかに狙っているだろう!?これは!?
神って何だよ!? 神って!?

「ヘルプ押し…」

もう、疲れた… 驚くのに…

そして、俺はヘルプを押しして説明を読み始めた。

…30分後…

ん… 代々必要なところだけ話すと、

この世界の名前は、”第282世界、フェランデイス”

因みに、他にも世界があることはみんな知ってるらしい

通貨はクオルというらしくて、カードから引き出せるらしく、預金
金額は晶貨から鉄貨まで全て千枚あった。(すごい大金だけど、も
う驚かない)

で、この世界には三つの陸上大陸と一つの空中大陸と一つの地下大
陸があるらしい。(うわっ、テンプレ!)

その大陸たちには、空中大陸以外には三つずつ国があるらしい。
で、その一つ一つの大陸には”大陸主”と呼ばれる国があって、大

陸を治めてるらしい。

一つ目の陸上大陸、”デルラゴ大陸”には、大陸主の”ロスヤナフ帝国”と”ムトニス共和国”と”自由カイクアンヘルト共和国”が、二つ目の陸上大陸、”サラザールス大陸”には、大陸主の”スルトニス共和国”と”ユーリアット魔術科学皇国”と”シュタイナー公国”が、

三つ目の陸上大陸、”サドーラ大陸”には、大陸主の”ギルロッド王国”と”ウエルダンド公国”と”ツエルプストー公国”が、地中海大陸の”クラウザット大陸”には、大陸主の”ヌルメンガード帝国”と”ケルベス王国”と”トルフィーヌ王国”が、空中大陸の”ウイスカイク大陸”には、大陸主の”ラスナムス神皇教国”がそれぞれあるらしい。（ラスナムス神皇自治領は首都の名前らしい）

で、ギルドがあつて自分は何気なくZクラスらしい（Gクラスは目立ちすぎるから格下げしたようだ）

で、今俺がいるのはサラザールス大陸のシュタイナー公国の東部にあるシュタイベルグ公爵領のようだ。

必要なころはこんなところかな。

「…物凄い、大陸名と国名に気になるところがあるな。」

ゼ　の使い魔ですか？ハリー　ッターですか？バ　オハザードですか？

あと、ドラッ　オンドラ　ーンの登場人物いますよね？

…気にしてたらきりがないな…

もう気にしないのが一番だな、やっぱり。

「さてと、クレルドが言ったことをやるのかな？」

そうして、俺はクレルドに言われた、能力の創造を行おうとした…が、

何故か軍人（兵士）に囲まれました（笑）

ハハツ！！テンプレだね！

…とか言ってる場合じゃねえな…

明らかに殺傷能力のある魔法らしきもの（水でできた二メートル位の槍）が突きつけられてるしなあ。

と考えると、周りの人達より勲章を多くつけた軍服を着た代表らしき20代後半くらいのイケメンが話しかけてきた。（美女じゃないのか…）

「！？」

「！」

うん、言葉が通じないし、取り合えず創るか（能力を）

と、思ったとたん頭のなかに

”神の能力管理”、

”神の絶対服従：能力制御”、

”神の絶対なる会話・筆記・説得・交渉・生活術”、

”神の特定人物接触術”を創造…

と出てきた。

簡単だし便利だな。でも、取り合えず今は効果を切るところ。

さてと、言葉がもう通じるはずだし、話してみるか。

「すまない。もう一度いつてくれないか？言葉が通じなかったから、今能力を発動させたところなんだ。」

「では、もう一度言う！お前は何者でなぜここにいる！？ここがシユタイルベルグ公爵邸の庭と知つての無礼か！？答えによつては殺すぞ！」

「（ふーん、こんな風に言つてたんだ）いや、すまない。実は他世界から来たくちでね。たまたま転移したのがここだつたんだ。だが、ここがシユタイルベルグ公爵邸の庭なら、ちよつどいい。公爵と会わしてくれないか？」

「バカが！貴様のような平民が公爵様が会える訳がなからう！言うことがそれだけなら、さつさと死ね！」

やっぱりそうなるか。まあ、仕方がないか。

今の俺の服装は黒いTシャツに白い上着にジーパンに胸にかけた十字架のネックレスにスニーカーだしな。平民に見えるか。

…でも、これを見せれば良いよな？

「…そうか…では、これを見ても俺は平民に見えるか？」

「なっ…！それは神の指輪…！」

そう、俺が見せたのはクレルドに貰つた、“24”と刻まれた神の指輪だ。

さつきヘルプで見たとき、この指輪は所有者のみが身に付けることができる、

大抵の人に見せれば何処にでも通してくれるほど凄いものらしい

（国の機密研究所とかどうなんだろう？今度試してみるか…）

この話が正しかったら、大丈夫だと思つたからだ。

…あれ？この代表の人の髪型、モ ハンの髪型の一つのレウスレイヤーじゃないか？…よし、これからこの人の呼び名はレウス隊長だな。

「すつ、すみません！まさか、筆頭中級神様とは思わず！了解いたしました！只今、公爵様にお伝えします！おいつ！早くしろ！」

言ったら言ったで、レウス隊長（仮）達が慌て出した。

そりゃあそうだよなあ… 殺すぞって言った奴が、そこそこの地位の神様だったんだから。

…ちよつとかわいそうだな。大丈夫っていつとくか。

「いや、別に構わない。気にする必要はないよ。いきなり現れたらそりゃあ警戒するだろうしね。君達に落ち度はないよ。」

あれ？今気づいたけど何故か口調が変わってる…？クレルドが変えたのか？神にふさわしいようにと。…気にしたら負けか？

そう考えてたら、レウス隊長（仮）達がひざまついて、

「筆頭中級神様の寛大なお心に感謝いたします！」

たった今公爵様と連絡がとれ、直ちにお会いしたいとのことですが！ご足労ですが公爵邸まで来ていただけないでしょうか？」

と言ってきた。

「（取り合えず今は公爵と会ってウェスカイム大陸に行く手段を見つけないとな。」

となると、ここで印象を良くしておいた方がいいか（いやいや、ご足労などは私に似合わぬ言葉ですし、私達の立場は平等ですからひざまづかないで下さい。」

「…！ は、はい！ありがとうございます！」

「では、すみませんが公爵邸まで案内してくれませんか？」

「はい！只今！」

おい！筆頭中級神様を公爵邸まで案内するぞ！直ぐに移動用魔法陣を用意しろ！粗相のないようにしろよ！」

「……………はい！」「……………」

うん。これでよかったかな？

しかし、口調がいつもと違うと何か違和感あるな。と思っていると、レウス隊長（仮）が話しかけてきた。

「すみません、筆頭中級神様。私の名前はヴィルクス・ナルム・リルレウスといます。」

シユtailベルグ公爵様の元でシユtailベルグ騎士団の騎士団長をしております。レウスとお呼びください。

突然で失礼ですが、筆頭中級神様のお名前を教えてくださいませんか？」

「（名前もレウスかよ。てか名前か…他にも世界があるんだし、日本に似た国も在るだろうから普通にいつていいかな？）

別にいいぜ。俺の名前は野川 楓だ。あと、あんまり堅苦しいのは嫌いだから敬語じゃなくていい。」

「野川 楓様ですね…。いえ、立场上敬語で話さなくてはいけないので…すみません…」

「いや、別にいいぜ」

そんな風に離していたら、移動用魔法陣が完成したらしい。

「じゃあ、移動するぞ!？」

「……………了解!」「……………」

「（さてと、じゃあ公爵に会いに行きますか次はどんなテンプレができるのかな？）」「……………」

足下の魔法陣が煌めき、俺達の姿は広大な大地から姿を消していた。

俺達が消えた瞬間、辺りに一瞬、閃光が走ったのに気づく者は誰も居なかった。

第三話（後書き）

今回でた奴の説明を…

ツエルプストー公国…使い魔の物語のゲ マニアの辺境伯の名前。
ヌルメンガード帝国…針ぼったーの例の人が殺した先代の闇の魔法
使いが作った監獄の名前。

デルラゴ大陸、サラザールス大陸、サドーラ大陸、クラウザット大
陸、ウエスカイム大陸…

とある生物災害ゲームの4に出てきたキャラ達の名前。 村長の名前
は忘れた。

自由カイムアンヘルト共和国…

俺が知っている鬱ゲーの中でもかなりの上位に食い込んでいるゲー
ムの一作目の主人公達の名前。 赤さんは怖かった軽くトラウマ。
でも2の最後で感動した。

だいたいこんなところですかね？まだあったら連絡よろしくお願
いします。

第四話

第四話

気がつくと、俺達は演習場らしき場所に立っていた。

「（ふーん。これが移動魔法か。案外便利だな）では、公爵の所へ案内してくれるか？」

「はい！了解いたしました！只今案内いたします！」

お前たちは休んでおけ！

楓様、こちらです。」

俺がそういうと、レウス団長は他の人達に休むように指示し、俺の前に立ち先導してくれた。

…しかし、すぐにシュタイルベルグ公爵に会うことは叶わなかった。

何故なら…

「て、敵襲！敵襲！」

ウ、ウエルダンド公国だー！！！！ウエルダンド公国軍が攻めてきたぞー！！！！」

「なっ！？楓様！早くこちらへ！公爵様のところへ向かいますよ！おい！お前ら、移動しながら詳しく話せ！さあ、楓様お早……」

パシュッ！！バンッ！ドオーーーーーー！！……

何故なら、ウエルダンド公国がシュタイルベルグ公爵邸を襲撃した

からだ。

- - - - -
- - - - -
公爵 side

シュタイルベルグ公爵領は、ブドウなどの栽培が有名で、
ワインなども名産品のひとつであり、
その味は遠く、ヌルメンガード帝国からもワインを求めて商人が来
るほどの美味しさである。

更には海が領土の東側に広がっているため、海に面したグレンジス
ト領府

(都道府県でいう県庁所在地のような場所)での交易も盛んであ
る。

そんな豊かな大地を統べるシュタイルベルグ公爵家は、代
々シュタイナー公国で重要な役職に就いてきた。

文では宰相や国王秘書、財務相等を。

武では近衛騎士団長や反乱や内乱時の総司令官等を歴任し、

更には王家と血縁関係があったため国王を三人も輩出した名家中の
名家である。

そして、今グレンジスト領府の雄大な大海原を望む丘の上
に位置するシュタイルベルグ公爵邸本邸の執務室で豪華な椅子に座
っている男…

いや、青年は、その名家の歴史の中でも、

初代当主のグレゼルフとこの男の父親である十七代目当主、ニルバ
ースに並び立つような名声を若干21歳で得た天才だ。

その青年の名前は、

第十八代シュタイルベルグ公爵家当主

シュタイルベルグ・イル・グレゼルフ

初代当主と同じ名前を冠する、天才である。

この青年は、後に楓と他の者達と共にこの世界…フェラン
デスだけではなく、多くの世界を巻き込んだ出来事に巻き込まれて
いく。

そんな彼は執務室の執務机に座って領内の治安状況の報告
書を読んで…

…いなかった…

「お〜い。リラちゃああん？お茶淹れてくれなあ〜い〜？」

「その前にその報告書を片付けて下さい。第一、まだお茶は残って
いるでしょう!？」

…冷却せよ、コールス…

「…もう冷めちゃったあ〜早く新しいの淹れ……」

ゴンツ！

「いたツ！お盆で叩くなよ！」

「だまらっしやい。第一、魔法で冷ましたでしょうに…」

いい加減にし「夜、一緒の部屋で寝てあげないよ?」…わかりまし
たよ!新しいのを淹れればいいんでしょう!?!淹れれば!?!」

「…………… (無言で笑いながらその様子を見ている) 」

こんなコントのようなを見せているのは、公爵夫人、及

び公爵秘書の

シュタイルベルグ・フィン・リラクス伯爵である。

何故、公爵夫人が公爵秘書と伯爵を兼務しているかと疑問に思いかもしれないが、

ここ、シュタイナー公国では普通のことである。

「はいどうぞ。新しいお茶と焼きたてのクッキーです。」

「おっ！ありがとうございます。んじゃ、食べ「公爵様！至急お耳にいたいことが！」……なんだ？」

グレゼルフがクッキーを食べようとした瞬間、三十代後半に見える男が部屋に入ってきた。

彼は、ローランディス・ボルス・バルトロメオ。シュタイルベルグ公爵家の筆頭家臣である。

「じ、実は、この屋敷から北東に90キロメートルほど進んだ場所について数十分前、

最高神序列第一位、祖龍神帝ゼロニウス神陛下の神力が検出されました。」

「何！？そうとなれば早く騎士団を送り、ゼロニウス神陛下をお迎えに上がらせる！」

「はい、了解いたしております。既にリルレウス騎士団長を含めた第一騎士団員26名を神力が検出された場所に派遣いたしました。ですが……」

「ん？珍しいな？お前が言葉を濁すとは。どうした？早く言ってくれ。」

「ええ…わかりました…」

実は、神力が検出されたのは祖龍神帝陛下だけではなくたんです。もう一名分、神力が検出されたんですが……」

「それがどうした？ゼロニウス神陛下の従者だろうに。」

「いえ、問題はもう一名いらっしやったことではないんです。

問題は検出された神力の量と持ち主です。」

「どういうことだ？」

「実は検出された神力の量があと少し及ばないながらも祖龍神帝陛下に匹敵するもので、

しかも歴代の神の神力名簿に載っているどの波形とも違うものでした。」

「な！？有り得ないだろう！？計器の不具合ではないのか！？」

「いえ、それは違います。今回検出された身元不明の神力が検出された後に祖龍神帝陛下の神力が検出されました。

計器の不具合であった場合、祖龍神帝陛下の神力が検出されたことも不具合の一部となります。

ですが、私が超広域力場探索魔法で探索しましたが、確かに祖龍神帝陛下のともう一名の神力が検出されました。

計器の不具合ではないでしょう。」

「……では、誰がそんな神力を放っているんだ？

……！……ま、まさか……あの方々の一人か……？」

「そ、それはわかりかねます……ですが、祖龍神帝陛下と一緒に居たということを見てみると、

あの方々の一員と考えて警戒しておいた方がよろしいでしょう」

「……そうしよう。……至急、領内全域の家臣に伝えよ。

最高神様と”筆頭中級神様が視察にいらっしやった可能性がある”と。」

「はっ！了解いたしました。」

普通は、最高神が一人、もしくは”認定されている神”を一人から複数つれてきて出向いた場合、

最高級の待遇で持てなすための準備をするだけで持てなす側は大丈夫だ。

しかし、それは最高神が”まだ認定されていない神を”連れて来た場合には180度変わる。

何故なら、その時最高神が連れて来た神は大半が成り立ての筆頭中級神だからだ。

何故筆頭中級神にここまで警戒するかというと、それは筆頭中級神の役目が原因である。

その筆頭中級神の役目とは、格下の者達などを監視・監察し、そして評価・警告・指導して最高神達に報告することだ。(楓は例外) まあ、これ以外にもまだあるのだが今は関係がないので省く。

これは各世界を管理している神々達や国家君主等の権力者達が暴政や悪政を敷かせないようにするためである。

因みに、その権限が高すぎるがために筆頭中級神に成るためには最高神を含めた最上級神メンバー全員から承認されてからさらに全員から任命されるか、

最高神序列第一位である神帝が任命し、最高神の他のメンバー全員から承認されなければならない。(楓は例外)

つまり、公爵のような権力者から見れば筆頭中級神は自身が行っている政治を審査する、いわば監察官のようなものなのだ。だから、こんなにグレゼルフ達は警戒しているのだ。(楓は例g.)

これだけを聞くと、筆頭中級神は賄賂などをもらい放題と考えるかもしれないが、それは大きな間違いだ。

何故なら、筆頭中級神は自身と同じ筆頭中級神をも監視するからだ。

相互監視とでもいうのだろうか？

例えば、とある筆頭中級神が賄賂を貰ったとする。すると、その筆頭中級神を監視している筆頭中級神、四名から五名が報告するということになるからだ。

因みに、これは上級神になるための試験でもあり、そして腐敗した神を見つけ出すという一面もあるため、滅多に表沙汰にはならない。

まあ、一番自由な役職でもあるので、筆頭中級神の数は結構多い。

そこまで話すと、バルトロメオが部下を呼んで指令を告げたあと、

二人は黙ってしまった。リラクス夫人は最初から黙って話を聞いていたが、話が終わってもそのままの体勢のまま動かなかった。

その沈黙を打ち破ったのは、大きな音だった。

第四話（後書き）

次回は戦闘に入るかも…？

あと、シュタイルベルグ公爵領の元ネタが知りたい人は、
Yahoo!とかGoogleとかでシュタインベルグ ワイン
って調べると出てきますよ。
あと、調べるときは”ル”じゃなくて”ン”ですから気を付けてく
ださい。

第五話（前書き）

今回少ないです。

第五話

第五話

大きな音とは、誰かが勢いよく執務室のドアを叩いたこと
によって起こったノックの音だった。

「公爵様！バルトロメオ様！」

連絡が着き次第、報告するようにおっしゃっていた案件の詳しい内
容がわかりました！」

それを聞くと、グレゼルフとリラクスとバルトロメオの間
には、一字一句も聞き漏らさないように、という思いからか、緊張
感が漂った。

「では早く言え。ゼロニウス神陛下ともう一名の方の繊細を。」

グレゼルフが目を瞑り、そう言ったのを聞いて、報告をし
にきた者は少し戸惑った顔をしたが、構わず報告した。

「…レウス騎士団長達が向かった場所にはノガワ カエデ様という
お名前の男性の筆頭中級神しかいらっしやいませんでした。
祖龍神帝陛下はいらっしやいませんでしたが…？」

報告した男がそう言うと、グレゼルフはピクツと目を少し
動かし、他の二人は呆けた顔になった。

「…そのカエデ筆頭中級神様だけをおいて帰ったのか？祖龍神帝陛
下は…？」

「おそらくそうでしょうね。まあ、これで少しは楽でしょう。筆頭中級神様だけでも準備に手間がかかるのに、最高神様までいらっしやったら困るわもの。」

バルトロメオとリラクスがそう言つと、グレゼルフは目をつぶつたままと言つた

「ふむ…ではゼロニウス神陛下の件は取り合えず置いておいて、件のカエデ様は今どこにいらっしやるんだ？」

「今、レウス騎士団長達と共に転移魔法を使用し、この執務室に向かつて下さっているようです。」

それを聞くと、グレゼルフはそれまで瞑っていた目を開き、高価な革張りのソファから立ち上がった

執務机の後ろにある窓から賑わっている領府の街と雄大な大海原を眺めながら言つた。

「…そのカエデ様がゼロニウス神陛下に何を言われたかはわからな
いが、あのゼロニウス神陛下のことだ。

何か考えがあつてこのシュタイルベルグ公爵領にカエデ様を連れて来たのだらう。

十中八九、何か俺たちに関係があることだらうがな。まあ、それはカエデ様と話をして聞けばいい。

ひとまず、カエデ様を丁重におもてなしするぞ。用意はしているな
？」

「はい！すでにできております！」

「では、直ぐにカエ…」

バンツ！

かったら終わってるぞ！？主に建物の強度が！）皆さん！だいじょうぶですか！？」

楓は”あるもの”をこの屋敷から100メートルほど離れた場所に展開し、更にそれを引き伸ばして、

日本の23区に値する広さのグレンジスト領府の街を全て覆い、攻撃から身を守っていた。

…その攻撃が普通の中級神がパツと作った程度の障壁程度なら容易く破壊出来るものと知るのは暫くあとのことだった。

楓はその”あるもの”を展開しながら、周辺にいたレウス団長達にたずねた。

「あ、ああ、私達は大丈夫です。

ところで、その今使っている魔法…いや、能力はなんと言うものですか？私は全く見たことがありませんが…？」

それを聞くと、楓は少し迷ってから、こう答えた。

「これは…神の絶対一方通行アブソリュート アクセラレータ…万物の方向を制御する能力で…私の能力の1つです。」

そう、あるものとは改造版一方通行アクセラレータだった。

楓は、クレルドが与えてくれた（何故かクレルドがやったとわかった）

驚異の反射神経で攻撃を感知し、瞬時に神の絶対服従の能力を発動させ、

”神の絶対一方通行”という能力を新たに創って展開したのだった。

（改造版というのは、その範囲を広げ、更に少し改造を施したから。）

それを聞くと、レウス団長達は驚愕した様子でさらにならずねてきた。

「ま、まさか…その能力は概念までをも制御することができるのですか…？」

「え？ええ…できることはできますよ…」

それに答えたら何故か…

「…「今までのご無礼！誠に申し訳ありませんでした！！まさか、身分を偽った新たな最高神様とは露知れず、本当にすみませんでした！！」「」」

…凄い勘違いをしながら、土下座して謝ってきた。

「はぁっっ！？」

第五話（後書き）

ネタ説明ですよ

一方通行…とある学園都市の第一位の超能力者さん、ってミサカはミサカは言っつて（ry…）

まあこれは、ちょっと楓が改造してるんで本家とは全く別物ですけど。

それはまた追々本編に出てくると思います。…てか、これが中心になっってくるかも…？

…期待はしないでくださいね（笑）

では、雷龍でした。

あ、次の更新はちょっと遅くなるかも…

第六話（前書き）

“凄い”世界の全ては神すらも知らない”のネタバレがあります。

ご注意ください。

あと、最後にちょっとしたお知らせがあります。

第六話

第六話

取り合えず、戦闘が始まっている（アクセラレータのせいで敵は一人も入ることもなく、魔法も効いてないけど）のにも関わらず、
土下座して謝っているレウス団長達の誤解を解くことにした。

「いやいや！？俺は最高神じゃないから！！ただの筆頭中級神だつて！？だから、土下座は止めて！？てか、反撃しないで良いのか！？」

しかし、俺がそう言うのとレウス団長達は不思議そうな顔をしてこちらを見上げながら問いかけてきた。

（土下座は止めてと言ったのに、完全スルーして土下座しながら。）

「で、ですが、概念に干渉できるというのは、最高神と一部の神力ちからの強い方の特権ですよ…？

せめてでも、最上級神様程の神力を持っていないと概念には干渉できないんです…。

それに、カエデ様が今おっしゃった、”神の絶対アフソリユート一方通行”という能力を私達は聞いたことはありません。

私達が聞いたことがあるのは、

”神の絶対服従”、

”神の電子分解構築”

”神の概念消却”、

” 神の時空世界制御”、
” 神の色彩隷属”、
” 神の無機物・有機物変換”
” 神の概念力場操作”

位ですよ？なので、必然的にカエデ様は未確認な能力を使用しているということになります。

なので、我達は新しく最高神様になられたが、まだ公表していないので知られないがために

筆頭中級神様に変装していらっしやった最高神様だと思ったのです
が…？

違いましたか？」

…うん、長ったらしい説明ありがとう、レウス団長さん。

その事を説明すらせず、”ヘルプ”にも書いていなかったクレルドは後でしめるとして…

でもね… その前にお前達（目の前で土下座してる騎士団長含めた四人）に言いたいことがある…

バツーーーーー！！！！

カンッ！カンッ！カンッ！ドオーーーーー！！

「俺の発言の後半半分をスルーして、さらにそんなこと説明している余裕

あったら、お前らもあいつらに反撃しろよ！？てか、命令がないから、ちょっと困ってるじゃないか！？」

折角こっちは被害がでないようにしてあるのに！！こっちは

攻撃できるんだぞ!？」

「…っ!？わっ、忘れてました!!すみません!今すぐ反撃に出ます!!」

カ、カエデ様はおできになれるようなら、その”神の絶対一方通行”というものを出来るだけ長時間展開して下さい。お前達!行くぞ!

「」「はい!」「」

そう言うと、彼ら四人は直ぐに走り去っていった。

…今まで、忘れてたって…

それで良いのか、シユタイトルベルグ騎士団…

……………あれ?

…今思ったけど、俺が行って戦闘の援護(方的蹂躪)したら、この公爵に恩売れるんじゃないかね?

って、あいつらを生け贄にしよう。

…よし、今すぐ行

「…さてと、行きますか…何を使おうかな?」

黒い笑顔を顔に張り付けながら、俺は座標移動ムーブポイントを使い、

自分が展開している障壁の中でも、一番攻撃を”逆転”させている座標に移動をおこなった。

俺が座標移動をして移動した場所…

そこは

- - - - -
- - - - -
- - - - -
公爵 side…

「…なぜだ…？何故、攻撃が防がれている…？」

グレゼルフ達は、執務室の窓から、ウェルダンド公国軍の魔術攻撃や、こちらに向かってくる兵達が跳ね返されているのを呆然と眺めていた。

グレゼルフがそう言うと、隣でそれまであらゆる攻撃を跳ね返していた様を見ていたバルトロメオがポツリとこう言った。

「あれは、何らかの物が当たればそれを跳ね返す、魔法…いや、あのような魔法は聞いたことがない…能力ですか？」

リラックスが、それに反応した。

塞である。

理由は多々あるが、大きな理由は三つだ。
まず第一は”円形街道隔壁”である。

バベルスを中心に等間隔に円状に広がっている何十、何百の円形街道は、常時展開している72の隔壁を除き、他の全ては緊急時には地面が盛り上がり、高さ50メートルの隔壁ができる。

更にはその隔壁からはあらゆる物理的、魔術的などのあらゆる干渉を遮断する隔膜が出ており、球形状に囲っている。

…想像して欲しい。最高神のみが破ることが出来る隔膜と隔壁がいくつもの円形の街道から伸び、地中と空中に何十、何百の球形状の壁を張っている様を…。

攻め込む方から見れば、正しく難攻不落の国家であろう。

これが、ラーズセンドが難攻不落である理由の第一に”円形街道隔壁”が挙げられる理由だ。

第二には、バベルスが存在することである。

バベルスは、国家としての要塞の中にある、更に堅牢な要塞である。何故ならば、バベルスでは約7000極^{ごく}人が約8不可思議年間^{ふかしぎ}生きられる食料や物資を備蓄しており、ラーズセンド世界統括合衆国民の全人口の約500倍の人員（現在の全ての世界の全人口の約32倍）が避難できる世界達の中継場所のひとつでもある、

あらゆる分野の兵器が最新から最古まで相当数搭載されており、あらゆる情報（全ての文化、歴史、人物など）を記憶しているスーパーコンピューターが50台以上もあり、

更には最高神でも破るのに苦勞する隔膜を五つも有しているからである。

因みに、全世界中で一番堅牢な要塞である。(当然w)

そして最後に、最高神達が居ることである。

なぜなら最高神は、全ての世界に共通する抑止力であるからだ。なぜ、抑止力であるかは語らなくても大丈夫だろう…。

で、その件の最高神達は、今ある会議室にて話し合っていた。

「…ふん…珍しいなこんなにクレルドが入れ込むとは。」

そういったのは、最高神の序列第二位の白靴 劉輔だ。

統括軍の黒い軍服を着ており、その容姿はクレルドと同じく百人中百人がカッコイイと言うほどに整っている。

「そうやな。確かに珍しいなあ…。ここまでクレルドが入れ込むとかめっちゃ珍しいやん。」

「そうね。でも、それだけ入れ込むまで実力があるのかしら?」

それに関西弁で答えたのは、序列第五位、垣村 帝督だ。

(公にしているなまえは偽名で、偽名はノルマンディー・ファルト・テイトールという)

因みに彼はくすんだ金髪で赤っぽいシャツと白衣を着ており、容姿はどこぞのスクールの末元物質

と、どこぞの朽木家当主の千本桜使いさんを足した感じで、パツと見はどこかの医者のような風貌をしている。

もう一人は、序列第四位、れいほういん 靈法院 きょうが 京伽だ。

黒いローブを着ているが、フードは被っておらずその綺麗な容姿が見えている。

顔は十字教の最大主教と通称シヨタコンのグループのアップポイント座標移動を足したような容姿だった。

それに対し、劉輔は苦笑しながら答えた。

「いや、実力はお墨付きだ。それもとびきりのな。」
「どういうことか我には全く理解できんのじゃが？」

それに対して聞いたのは、序列第三位、ラスナムス・ユラルテ・タルディアート・ベネディクトだ。

黒いビジネススーツにコートをプラスしたようなたけの長い独特なスーツを着て、茶色の杖を持っている。

「実はな、あいつは なんだよ。」

「「「はあっ!?!?」「「「」

劉輔がそう言つと、他の三名は絶句した。

それから暫くたってから、いち早く回復した帝督が言った。

「…まあ、そりゃあ実力は申し分無いわな…逆に実力が無かったらそれこそビックリするわ。なんたって、 やからな。」

「ちやうか?」

「「「……………」

帝督が言葉を発したことにより、放心状態から回復したベネディクトと京伽は帝督の言葉に無言で首肯した。

「ふう…確かに驚くよな？」

俺も最初に聞いたときはお前達みたいに絶句したぜ…

ま、期待しようぜ。力を得た、
か…」
がどついつ風に動く

劉輔は今座っている丸い大机の中心に出来た円形の画面を
覗きながら言った。

「なあ、野川 楓？」

そこにはレウス騎士団長達と話している楓が写し出されて
いた。

第六話（後書き）

最高神のチート能力の効果はあと少したったらわかります。

まあ、一部の物はわかるでしょうが…

あ、あと今回のネタ説明↓

座標移動：とある学園都市のレベル4の暗部所属シヨタコン大能力者。個人的に結構好きなキャラ。

垣村帝督：言わずと知れた、冷蔵庫型工場長。垣村の能力が本家の未元物質にいたので名前をパクりました。

この小説では脳を三分割された工場長にはならないのであしからず。因みに性格は青髪ピアスが標準、本気になると本家の垣根さんが出てきます。

お知らせですが、能力を募集します。

神の能力でも、人の能力でもどちらでも良いです。なにか案がありましたら、

能力名と効果を書いて感想かメッセージに書いていただければ嬉しいです。

では、雷龍でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4913u/>

異世界最強主人公探索記

2011年9月19日19時37分発行